

5節 善い業の不完全性

5-① われわれは自分の最善の業によっても、神の御手から、罪の赦しも永遠の命も受けるに値しない。それは、それらの業と来るべき栄光との間に非常に不釣り合いがあり、またわれわれと神との間に無限の隔りがあるためである。じっさい、われわれはその最善の業によっても、神を益することはできないし、自分の以前の罪の負債を償うこともできない。

「なぜなら、律法を行うことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」 ㊦

ローマ人への手紙 3・20

「もしアブラハムが行いによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。……働く者の場合に、その報酬は恵みでなく、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。ダビデもまた、行いとは別の道で神によって義と認められる人の幸いをこう言っています。」 ㊦

ローマ人への手紙 4・2, 4-6

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。」 ㊦

エフェソの信徒への手紙 2・8, 9

※この聖句に対して、カルヴァンは行いの助けなしに義とされることを強調する。

「パウロは、己の義を欠いている者にとって〈信仰の義〉こそが逃れ場であることを知っているから、信仰によって義とされた者はみな〈行いの義〉から除外されると大胆に表明する（エフェソ2・9）。しかもこのことは全ての信仰者に共通の確定したことであるから、こうして行いによって義とされる者は一人もなく、むしろその反対で、人は行いの助けなしに義とされるのである。」（綱要）3-17-8

「神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました。この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです。神は、わたしたちの救い主イエス・キリストを通して、この聖霊をわたしたちに豊かに注いでくださいました。こうしてわたしたちは、キリストの恵みによって義とされ、希望どおり永遠の命を受け継ぐ者とされたのです。」 ㊦

テトスへの手紙 3・5、7

「今の時のいろいろな苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」 ㊦

ローマ人への手紙 8・18

「主に申します。

〈あなたはわたしの主。

あなたのほかにわたしの幸いはありません。〉」 ㊦

詩編 16・2

「人間が神にとって有益でありえようか。

賢い人でさえ、有益でありえようか。

あなたが正しいからといって全能者が喜び

完全な道を歩むからといって

神の利益になるだろうか。」 ⑧

ヨブ記 22・2、3

「あなたがただしくても

あなたは神に何を与えようか。

神は、あなたの手から何を受けられるだろうか。

あなたの悪は、ただ、あなたのような人間に、

あなたの正しさは、ただ、人の子に、

かかわりを持つだけだ。」 ⑨

ヨブ記 35・7、8

※カルヴァンは、我々が罪の赦しと永遠の命を受けるのは、行いによらず、我々の価値によらず、神の慈しみによるとして言う

「我々が行いから義とすることを取り去ったのは、善き行いが為されないためでも、為されたことが善でないためでもなく、我々がこれに信頼せず、これを誇らず、これに救いを帰さないためだからである。我々の確信、我々の誇り、また救いの唯一の錨は、神の子たるキリストが我々のものとなり、それに対し我々自身は神の子また天国の世継ぎとなり、己の価値によらず神の慈しみによって永遠の幸いの希望に召されたところに存するからである。」(綱要) 3-17

5-② わたしたちは、自分にできるかぎりのことをなし終えたときも、自分の義務を果たしただけで、わたしたちは役に立たない僕なのである。

「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、〈わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです〉と言いなさい。」 ⑧

ルカによる福音書 17・1

※この項の主旨に対して、カルヴァンは土地の借地権と所有権、奴隷と自由人のたとえをもって説明する。

「他者の寛容によって土地の用益権を得ている者が所有権の名義まで自分のものにしたとすれば、この忘恩によって持っていた物件まで失って当然ではないだろうか。同様に、主人によって解放された奴隷が、解放されたから自由人になれたという境遇の卑しさをいっわ詐って生来の自由人であると吹聴するとすれば、以前の奴隷の身分に引き戻されるのが当然ではないだろうか。好意を受ける正しい態度は、与えられた以上のものを厚かましく己に帰することなく、善の原作者から賛美を横取りせず、むしろ、我々に移譲されたものも依然としてその人のものであると見るようにすることだけである。人に対してもこのような慎みを守るべきであるなら、まして神に対して負うところがどうであるかを銘々は考えなければならない。」(綱要)3-15-3

5-③ また、わたしたちの業は、善いものである限りは、神の御霊から出て

いるのである。

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁じる律法はありません。」 ㊦

ガラテヤ人への手紙 5・22、23

5－㊦ わたしたちの善い業が、わたしたちによってなされているかぎりは、汚れていて、多くの弱さや不完全さが混じり合っていて、神の裁きの厳しい規準に耐えられないのである。

「私たちはみな、汚れた者のようになり、
私たちの義はみな、不潔な着物のようです。
私たちはみな、木の葉のように枯れ、
私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。」 ㊦

イザヤ書 64・6

「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」 ㊦

ガラテヤ人への手紙 5・17

「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分の望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。・・・わたしは、自分の内にはつまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうとい

う意志はありますが、それを実行できないからです。」 ㊦

ローマの信徒への手紙 7・15、18

「あなたの僕を裁きにかけてください。

御前に正しいと認められる者は

命あるものの中にはいません。」 ㊦

詩編 143・2

「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら

主よ、誰が耐ええましょう。」 ㊦

詩編 130・3

※ この5節は、「クリスチャンのなすよきわざの限界が告白されている。わたしたちは聖霊の恩恵的助けによってさえも、決して救いを買取るほどの善をなしえる者ではないこと、また、クリスチャンの善行は、一方、聖霊のみ業であるが、同時に人間の業でもある。そして、人間はどこまでも汚れ、腐敗した人間性より解放されないから、その業も地上では、やはり完全な善ではありえないのである。」(解説)

「敬虔な者として死すべき肉に取り巻かれているのであるから今なお罪人であり、その善き行いも漸く緒についたばかりであり、肉の悪の腐臭を発している。彼ら自身としてでなくキリストにおいてでなければ、神は彼らとその行いを恵み深く受け入れることはできない。」(綱要)3-17-5